

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(1)被災後、妻と子と離れ

東京新聞 2021年1月26日 配信



2011年3月11日、福島県伊達市の保原高校で入試の判定会の会議中、教員の携帯電話が一齐に鳴り始めた。国語教諭で詩人の和合亮一さん＝当時(42)＝は「音を消したはずなのに」と不思議に思った。携帯に触った途端、最初の衝撃が襲ってきて、ぐわんと地面が波打つ。続いて経験のない横殴りの衝撃。必死に机の下に潜るが、揺れは止まらない。「外に出ましょう」という野球部顧問の声を合図に一階窓から中庭に出た。ガラスが割れ、校舎が壊れる音、地鳴り…。みぞれが降ってきてあぜんとする。「次は収まってくれ」と祈るが、これでもかこれでもかと揺れは続く。授業で生徒のいる日だったらと思いぞっとした。妻の携帯に奇跡的につながり、小学校六年の息子を学校に迎えに行ってもらう。和合さんは連絡のつかない福島市の実家に向かった。道路崩壊や通行止めで大きく回り道をし、ようやく実家に着いて両親らの無事な姿を見たとき、安堵(あんど)で思わず涙があふれた。震災直後から原発が危ないという話は出ていた。和合さんは手帳に、出来事や津波の死者数などをひたすら書き留めた。書くとなぜか安心した。翌日、福島第一原発1号機が水素爆発。夜、東電社員の教え子が「できるだけ遠くに逃げてください」と電話をくれた。父親は足が悪く、両親は避難しないことを選択。和合さんも福島に残ることを決意した。山形の妻の実家に、妻と息子が避難したのは十六日朝。「二度と会えないかもしれない」。脳裏に不安がよぎった。(署名記事)

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(2) 孤独と絶望に襲われ

東京新聞 2021年1月27日 配信



妻子が山形に避難した後、ひとけのない教職員住宅に和合亮一さん(52)は残った。福島第一の3号機が爆発後、周辺の人たちも避難していた。2011年3月16日朝、福島市の空間放射線量は毎時20マイクロシーベルト。通常レベルの500倍と報道されていた。ラジオではアナウンサーが「避難するみなさん、どうぞ落ち着いてください」と時折、涙ぐみながら呼び掛けていた。「福島も日本も終わりなんだ」。無人島に一人であるような孤独感と絶望感が襲ってきた。

空気の中に潜み、ともすると自分の命を奪っていくモノへの恐怖。ひっきりなしに襲う強い余震。食料もガソリンも手に入るあてはなかった。一人になり、どんどん気力がなくなっていった。次に原発で大きな爆発が起きたら終わりだと、死を覚悟した。

20代から詩を書き、詩集が七冊出していた。賞を取った後は依頼された執筆をしてきたが、閉塞感を感じるようになっていた。自分を思い返すうちに、激しい怒りが湧き上がってきた。「これで終わっていいのか」「どうして福島が」「なんで息子と今生の別れをしなきゃならないんだ」

あしたは生活が消滅するかもしれない。この絶望感を誰かに伝えたい、何とかして言葉に残したい、という衝動に突き動かされる。体の中から、詩を書く自分がマグマのように現れてきた。パソコンを開き、ふとずっと使っていなかったツイッターを思い出す。「行き着くところは涙しかありません。私は作品を修羅のように書きたいと思います」。つぶやきが始まった。

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(3) 怒り 言葉の連打に

東京新聞 2021年1月28日 配信



2011年3月16日の午後9時すぎから始まった和合亮一さん(52)のツイッターは、最初は自身の無事を伝えるものだったが、次第に東日本大震災や原発事故への怒りに変わり、連打となっていく。それは深夜まで続いた。当時のツイッターのフォロワー(登録読者)は7人。和合さんは誰かに受け止めてほしいと願ったが、誰かが読んでくれるとは考えていなかった。ただインターネット上でも言葉を残したいと思った。

「放射能が降っています。静かな夜です」4回目でこう投稿したとき、頭が白熱していくのがわかった。そして震災後の6日間が、怒濤のようによみがえってきた。余震と放射能におびえ、現実から逃げ惑った日々。この震災はとても表現できないと言葉を失い、詩の書き方も分からなくなった。錯綜する情報に振り回され、自分がここにいないような、自分が自分でなくなったような感覚。震災後を振り返った後、怒りとともに、頭の中に言葉が湧き上がってきた。

「ここまで私たちが痛めつける意味はあるのでしょうか」「この震災は何を私たちに教えたいのか」。パソコンを打つ間も、外は放射線量が高くて出られない。独房のような部屋を、強い余震が絶え間なく揺らしていた。怒りと悔しさと情けなさが入り交じり、「チクショー」と呟き、泣きながら言葉を打ち続けた。

「明けない夜はない」午前0時半。投稿を終えたとき、3時間が過ぎていた。フォロワーは全国に広がり、272人になっていた。

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(4)コンドハ負ケネエゾ

東京新聞 2021年1月29日 配信



ツイッターは一日でやめるつもりだった。だが、福島県内の避難所や全国各地からたくさんのメッセージが届き、和合亮一さん(52)は驚いた。

「読んでいて不思議と静かな気持ちになりました」「福島に残した父を思って泣きました」「心が折れそうになっていましたが、進むべき道が見えてきました」「あしたも読ませてください」

1日目の2011年3月16日夜に、和合さんが投稿したのは40回以上。社会が崩壊し、日常生活が奪われそうな中で、ひたすら頭に浮かぶ言葉を、ツイッターという1回140字の枠組みに投げ込んでいった。怒りと絶望でいっぱいになっていた。

誰かにぶつけたくても、ぶつけられない行き場のない怒り。それを言葉にし、ツイッターで吐き出した。自分は絶望しているんだ、悲しいんだ、追いやられてどうしようもないんだ。指が動くまま文字を打ち続けた。書くことで、自分の気持ちに気付いた。怒り狂う自分に寄せられた温かい反応に、背中を押されたように感じ、和合さんは翌日も投稿。次第に毎晩午後10時ごろから2,3時間やるようになる。フォロワーは2日目には550人、3日目朝には800人に膨れ上がった。

「しーっ、余震だ」ひどい揺れは続いていた。書きたい言葉がいくつも浮かび、キーボードを打つスピードが追いつかない。書くうちに闘争心が生まれ、このままでは終わらないと宣言した。

「私は震災の福島を、言葉で埋め尽くしてやる。コンドハ負ケネエゾ」

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(5)「詩の礫(つぶて)にしよう」

東京新聞 2021年1月30日 配信



「あなたはどこに居ますか。私は暗い部屋に一人で言葉の前に座っています」

2011年3月18日のツイッターはこう始まる。相次ぐ余震に揺られ続け、和合亮一さん(52)は酔ったようになっていた。夜は眠りが浅く、揺れで何度もたたき起こされた。外の放射線量は高く、窓が開けられないまま、教職員住宅2階の部屋に閉じ込められていた。この日は大きな余震が何度もあった。何度目の揺れだっただろう。午後に本震と同じと感じるぐらい大きく揺れ、目の前のタンスが「歩いてきた」と感じた。建物の倒壊の危険を感じて部屋を飛び出すが、避難する間も書きたいことが止まらない。左手にノートパソコンを持ち、右手で文字を打ちながら階段を下りた。玄関まで行き、揺れがおさまったので2階に戻る。部屋のドアを開けようとノブに手をかけた瞬間、ツイッターの詩の題名を「詩の礫にしよう」とひらめいた。直感的なものだった。震災までは、大きな一塊で現代詩を書いていた。だが原発事故後は、頭に浮かぶことを本能のままに、ツイッターで小石のように次々と投げた。前触れもなく突然、大地震や津波が襲ってきた不条理。奪われたたくさんの命。原発は絶対に爆発しないと思っていた自分への怒り。平和な生活が壊され、全てが覆された絶望。日々、言葉の礫をマシンガンのように打ち続けた。何をしても福島は変わらず、なしのつぶてだとも感じた。余震に揺られながら、怒りだけで自分を保っていた。

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(6)「赤い水」に涙止まらず

東京新聞 2021年2月2日 配信



震災後、ガソリンはなかなか手に入らなかった。ラジオでは「外に出た服は燃やした方がいいでしょう」「屋外に行ったら髪と手と顔を洗いなさい」と言っていたが、断水で体を洗う水などなかった。和合亮一さん(52)は外出時に着た服は、家に入る前に全部ビニールに入れた。待望の水が出たのは、震災の一週間後。ほっとするが、水道の蛇口からはいつまでも赤い水が出続けた。風呂にたまり続ける紅の水をため息をつきながら抜き、浴槽を洗う。朝方から夕方まで水を出しても、変わらなかった。

「一週間も私の汚れを着ている私」「7日間の私を着ているのです。きみは着たことがあるかい」

ツイッターにこう記した。風呂に入れず一週間。髪はベタベタ。限界だった。精神的にも追い詰められていた。和合さんは風呂の壁を殴り、拳が痛くなって平手でたたき、駄々をこねるように風呂場の床で暴れ、大声で泣いた。それでも流れる水は赤かった。まだ水が出ない被災地もたくさんある、水が出ただけありがたいんだ、と思うが、悔しくて涙が止まらなかった。家を飛び出し、タクシーに乗る。運転手にぶちまけると「人間はあかで死にませんよ。元気出して」と励まされた。いつも行く温泉が、奇跡的に開いていた。久しぶりに見た湯気。せっけんもありがたかった。男の子が湯船で父親とふざけているのを見て、避難せずにいるのだろうかと思いながら、息子を思い出し寂しくなる。昨日は息子の小学校の卒業式のはずだった。

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(7) 息子との思い出 次々

東京新聞 2021年2月3日 配信



久々に食料を買って福島市の教職員住宅に戻ると、放射線量や放射性セシウムについての注意書きが、掲示板に貼られていた。すぐには症状が出ない値。後から何か起こったら、その時に考えるしかない、和合亮一さん(52)は覚悟する。事故から2週間がたとうとしていた。テレビでは、福島第一原発の原子炉内の温度が高いことや、福島県産や茨城県産の野菜が出荷制限されたと報道されていた。これでは山形に避難した息子は、帰ってこれないかもしれないと和合さんの心は沈んだ。

息子の勉強机の上には、以前ねだられて渡した原稿用紙が、重ねて置いてあった。父親の姿を見てか、僕も物を書く人になりたいと言っていた。ちょっと笑って原稿用紙をめくると、面白そうな小説の書き出しが記されていた。最近読んでいた小説をまねているな、と一人で笑っているうちに悔しくなり、和合さんは目尻の涙を手でぬぐった。息子との思い出が次々と浮かんだ。ボウリングでストライクが決まりガッツポーズをする息子。にこにこして部屋に来たのに、仕事で遊んでやれなかった息子。小さいころから、寂しい思いをさせてきたと思い起こす。当たり前であった生活は戻らない。

それでも、家族が帰ってくる日を和合さんは信じていた。小学校の卒業式があったはずの朝、息子に詩を書いた。ランドセルをしょった入学したときの姿が浮かんだ。目に入れても痛くない存在だった。卒業おめでとう、父は君を誇りに思う。電話で詩を読むと息子は黙って聞いていた。

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(8)福島を諦めない 挑む

東京新聞 2021年2月4日 配信



福島に関するいろいろなうわさ話が流れていた。福島と書いたら、避難先で宿泊を断られた。「福島の人には『福島の人』って名札を貼ってもらえないか」と放射能を恐れた県外の人との会話を聞いた…。「私たちは噂(うわさ)話の中を暮らす。息を殺して嵐の中を暮らす」。2011年4月9日。和合亮一さん(52)はツイッターにこう記した。震災後、福島という響きが完全に変わってしまったのを感じていた。和合さんは福島で生まれ育った。風や土、光、水、自然に恵まれ、穏やかな気質の人々。祖父母には四季折々を大切にすることを教わった。動物や鳥の声、鮮やかな植物の色。季節を感じることは詩を書くことにつながった。福島で生きていくと決めたのは、息子が生まれた時。終(つい)のすみかという意識が生まれた。

それが原発事故で一変。福島は「フクシマ」になり、一晩で世界に広まった。故郷の名がこれほど脅威として伝えられるとは思ってもいなかった。避難する人々の波を感じ、福島が捨てられていく、こんなにも故郷とはもろいものだったのかと苦しくなる。同時に故郷を離れる人たちの身を切られるような辛さを感じた。

「福島を諦めない」「福島の力を信じる」。ツイッターに書いた言葉は、最後まで残ってやるという挑むような気持ちと、もう一度福島を取り戻したいという思いだった。この日、息子から電話があった。「福島に戻りたい。学校に行きたい」「福島のために僕も頑張りたい」「戻ろうか」。電話を切ると、泣いている父親が一人部屋にいた。

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(9)多くの命 津波に奪われ

東京新聞 2021年2月5日 配信



震災から3週間が過ぎた。ようやくガソリンが手に入るようになり、和合亮一さん(52)はすぐに福島県相馬市の松川浦に向かった。相馬は幼い時によく遊びに行った場所だった。隣の南相馬市は教員としての初任地で、20代の6年間を過ごした。津波被害のひどかった浜通りの海で、亡くなった教え子やその家族に手を合わせたかった。破壊された防波堤、陸に上がった船、ひしゃげた家、土砂に埋もれた車、靴、茶わん…。和合さんは目の前の光景に衝撃を受けた。あちこちに散乱した家族アルバム。持ち主はどうしたのだろうか。津波の爪痕は想像以上に凄惨(せいさん)で、そこにあったはずの風景がバラバラになっていた。

福島県警の警察官だった教え子は、住民を高台に誘導している時に津波に巻き込まれ、行方不明のままだった。意志が強く、剣道も強かった。警察官は彼の子どもころからの夢だった。まだ24歳だった。友人の母親も津波にさらわれ、浜通りのどこかに眠っていた。両親を失った教え子もいた。たくさんの命が一瞬で奪われた。津波となり破壊の限りを尽くした波は、今は静かに寄せて返していた。向こうから歩いてきた高齢の男性が、両手で涙を拭っている。海辺を渡る風の音が、泣いている声に聞こえた。祈るしかなかった。傾いた電信柱も、黙礼しているように見えた。自分は詩を紡ぐしかない。だが生き残った人間が、亡くなった人たちに言葉をささげるのは、許されるのだろうか。和合さんは静かに自問した。

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(10) 喪失の中で感じた光

東京新聞 2021年2月6日 配信



山形に避難していた妻と息子が福島に帰ってきた。和合亮一さん(52)は心配だったが、息子の気持ちを尊重したかった。震災から1ヵ月。その間に、福島を襲った余震は1000回を超えた。小学校の卒業式はなかったが、中学の入学式は行われた。新入生の名前を呼んだ後、在校生が一斉に立ちベートーベンの「喜びの歌」を歌う。力強い歌声を聴き、未来は彼らがつくってくれると感じて涙があふれた。

震災後、初めて相馬に行ってから、和合さんは浜通りに何度も通った。見渡す限りのがれきの海。見えない津波を常に感じた。失われた命、たくさんの悲しみや、絶望。胸の奥に鎮魂の思いが灯(とも)る。それは震災後、怒りと絶望感から、次々浮かぶ言葉を投げ続けた「詩の礫(つぶて)」とは対照的な、静かな気持ちだった。浜通りの海辺を歩きながら、気付くと雲間や光を探している自分がいた。亡くなった人たちに言葉をささげたい。それは祈りなのではないかと、和合さんは思った。

小学校3年生のとき、一緒に暮らしていた大好きな祖父が亡くなった。悲しくてどうしたらいいのか分からなかった。僧侶の読む般若心経を耳で覚え、意味も分からないのに毎日、寝る前に祖母と唱えた。唱えた後、目の前が明るくなり、祖父への思いが昇華していく気がした。喪失の中で感じた光だった。死者への鎮魂と祈り。1ヵ月半、每晚「詩ノ黙礼」の詩を書き続けた。言葉には力がある。死者への思いを追うほど、和合さんは生者の命や生きるエネルギーを感じた。

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(11)午前零時よ、来るな

東京新聞 2021年2月9日 配信



震災後の一カ月で、和合亮一さん(52)が福島市の教職員住宅の窓を開けたのは一度だけ。少し開けてすぐ閉めた。「窓を開けてはいけない」「雪や雨に触れないように」と言われていた。窓を開けずに見上げる空。ふと草野心平さんの「何んたる声をたてたい吸ひ込む空」という詩の一片が浮かぶ。放射能への不安がなかった時代の詩人の美しい言葉を思い、ツイートする。

「外で、空気を『吸ひ込む』ことなぞ、出来やしないのです。放射能」

浜通りに通う和合さんの心には、依然として黒い津波が押し寄せていた。海沿いで流されて跡形もない家。がれきを前にぼうぜんとする人たち。悲しい家族の話をたくさん聞いた。生きていてくださいと心の中で祈った。浜に流れ着いた遺体は高校の体育館に安置されていた。原発から10キロ圏内では、津波の行方不明者の捜索が始まったばかり。どう魂を鎮めたらいいのか。毎晩不眠に悩まされた。20キロ圏外の福島県飯舘村全域や、和合さんの母親の故郷・川俣町の一部に避難指示が出た。飯舘には多くの知人がいた。住民がどれだけ村を愛しているか。避難計画は「身を切れ」という命令だと思った。自分たちに何の罪があるのか。避難区域が近づいてくるのを感じた。

2011年4月22日、20キロ圏内が警戒区域に指定された。故郷に許可なく入れないとはどういうことなのか。住民の故郷が失われる時、和合さんは投稿した。午前零時よ、来るな。午前零時が、来た。

<ふくしまの10年・詩が生まれるとき>

(12) 言葉で橋をかけたい

東京新聞 2021年2月10日 配信



福島・浜通りに通い、死者への思いをつづりながら、和合亮一さん(52)は教え子や親しかった人に会いに行った。話をするうちに、被災した人に今、話を聞いて記録しなくてはと感じた。震災をどう受け止めればいいのか、どう傷を受けたのか、気力をどう取り戻そうとしているのか…。再生に向け、生き残った人たちと向き合いたかった。インタビューは初心者。お互い泣きながら話を聞いた。聞きたい言葉を聞いた時、相手の言葉が輝いてみえた。それを帰ってすぐ詩にした。

福島県南相馬市のクリーニング業の高橋美加子さん＝当時(63)＝は、電気のついていない真っ暗な町に戻り「別の生きものが住んでいるようですごく恐ろしかった」という。でも旧ソ連のチェルノブイリ原発事故の汚染地で暮らす高齢者たちの映画を思い出し「ここでいい、ここで生きていこうと思った」と語った。

富岡町から郡山市に避難していた理容業の遠藤千代子さん＝当時(67)＝は、避難所で人を励まそうと声を掛けたが、みな気がめいっていて応じてもらえず、自分の存在価値に悩み思い詰めた。でもボランティアの人が「全部聞くよ」と一日中話を聞いてくれてようやく眠れ、悩んでいる人の話を聞くようになったという。「言葉には橋『言の橋』がある。よい架け橋をつくれれば人と人をつなぐんだよ」

言葉には明かりがある、人の気持ちをつなぐ力がある。震災や原発事故は福島だけの問題じゃない。自分の住む福島から言葉で橋をかけたい。和合さんはそう思った。